

# と 経営 健康

## 第1回

### 女城主・井伊直虎

講談師 一龍斎貞花

今年の大河ドラマは「井伊直虎」。

これまでほとんど知られていなかった人物ですが、家再興のために立ち上がった強い信念を持った女性です。女性進出推進へのアピールになるといえますね。

寛弘七年（一〇一〇）正月、八幡宮の神主が若水を汲みに来ると、井戸の脇に生まれたばかりの赤子の捨子、橘の小枝を握りきりりとした顔つきの男の子。井戸の脇に橘の木があり、親が無事を祈って小枝を握らせたに違いない。「これはただの赤子ではない、神の授かりものかもしれない」産着に橘の紋を付け大切に育てます。

七歳になった頃には聡明で、

「ありや、神の子じゃ」そんな噂を耳にした藤原道長と同じ名門の出で、

遠江を支配しておりました藤原遠江守

共資は、男子がなく神主に願って養子にし共保と名付け、共資が亡くなるや、井伊谷の井戸から拾われたと聞かされていたところから、家紋を井桁とし井伊と名乗るようになったというのが、井伊家に伝わる伝説。

その後、南北朝の戦いの折、新田義貞軍の中に井の次郎道政という武将がおり、井伊家の惣領が代々名乗る次郎の名は義貞から頂いた名前、井伊谷に逃れた宗良親王は、道政の娘を側室にし生まれたのが尹良親王。宗良親王は吉野でなくなりましたが、井伊谷城裏手にお墓が建てられているという名門の井伊家。

永正十四年（一五二七）、今川義元

の父氏親が遠江を平定、井伊直平は娘を人質に差し出し和睦、引馬城を与え

られ今川の配下に。井伊家二十代直平

に五男一女、嫡男直宗が本拠井伊谷城主、娘が人質となった女性で、出家中の義元が手をつけ懐妊、出家だからまづいと重臣関口に与え生まれたのが瀨名姫、家康の妻となる築山御前。二男南溪、直平が側室に産ませた子で、先祖の菩提を弔うべく龍泰寺に入って出家。三男直満、四男直義、五男直元は病死。直満、直義が長男直宗の子直盛を補佐。後継者である直盛に男子なく女一人。名前は不明。この女性が主人公の直虎。昔は大名の娘でも女とあるだけで名前の判らない娘が多かった。作家が、おとわ、香、祐などと付けていますが、大河ドラマがおとわです。で、おとわで申し上げます。

直平は、おとわと直満の伴亀之丞と結婚させ、井伊家を継がせようと考え

ます。重臣いづれも賛成したものの筆

頭家老の小野和泉守は、「亀之丞が家督を継げば、親の直満が力を持つようになり己の立場が危うくなる」と考えます。小野は家老でありながら、井伊家の主の座を狙い今川にすり寄っていた。直宗が亡くなり、直盛が当主になった頃から、勢力を延ばしてきた武田信玄が、国境いの井伊の領地に進攻、これを防ぐべく、直満・直義が兵を集結。これを見た小野は、ここぞと駿府へ駆けつけ「兩名、今川を裏切るため兵を集めています」と通報。

義元はただちに「弁明のため、駿府に出頭せよ」、兄弟なんの疑いもせず駿府へ。義元は、家来に命じて二人を暗殺。

「おのれ和泉め、家老のあやつが裏切るとは……」

家老の陰謀、悲劇の始まり

「兩名太守の御前にて狼藉の振る舞いあり生涯仰せつけられました。太守殿のお下知を申し上げる。井伊直満不屈きにより一子亀之丞を失い申すべきこと。なお某、ご当家目付を仰せつかりました」

目付とは動静を見張る役。

「即刻亀之丞をお引き渡しを」

「まだ葬儀の最中、今夜の野辺送りが済むまで断じて渡す訳には参らん」

「では明朝寅の刻（午前四時）に受け取り申す。心得違いなさらぬよう」

「おのれ、主家の子を殺すとは」

「口惜しいが今川に対抗するだけの力はない。おとわは年齢好が似ておる、亀之丞の衣服を着せれば身代わりがつとまろう。そのすきに亀之丞を連れ出すのじゃ」

城から二里ほど離れた山中に古ぼけた社があり、身を隠すにはもってこい。守り役の勝間藤七郎が付き添い、まんと小野の目をごまかし、亀之丞は危機を脱出。

「太守のお申し付け、何としても探し出し処罰致しますがご承知を」

「おのれ和泉、くどいっ」

南溪ただちに、「近くでは危ない、すぐ下伊那の松願寺へ行け。わしから頼んでおくから安心せい」

許婚の亀之丞がいなくなつて四年、

「此の度義元様から、亀之丞はまだ見つからぬかときついお叱り。行方不明とあらばおとわ様の婿に某の息子を入れよとのご命令でござる」

「うぬは！」直盛歯がみをしたが

「祝言は今年の秋、家督を譲る誓紙を差し出せとのこととござる」

義元に取り入り、井伊家乗っ取りを策す和泉守。

おとわは、馬を走らせると龍泰寺へ

「私は尼になりとうございます。南溪禪師様のお弟子にして下さいませ」

「そちは本気で尼になりたいと申すか」

「ハイ、何卒お聞き入れくださいませよう。私の相手は亀之丞よりおりませぬ、何卒」

言うや懐から懐剣を取り出し、「ハッ」と思う間もあらばこそ、緑の

黒髪をばつさりと切り落とした。胸中さどつた南溪が

「そうか、そこまで覚悟か、よう分かった」

「井伊家の惣領は、代々次郎を名乗る。新田義貞公から頂いた由緒ある名前。さればおとわ、そなたは女子であれ井伊家の惣領、よつて次郎の名と、出家の証したる法師、法名を祐圓。次郎法師祐圓と名付けよう」

縁談を拒否するには、これしかありませんでした。

小野和泉守がなくなり、おとわの婿養子にと目論んだ長男政次が、但馬守を名乗り家老職を引き継ぎます。

「和泉が亡くなったのでやつと亀之丞を呼び戻せる」

伊那から戻ってきた二十歳の亀之丞は、晴れて元服し井伊肥後守直親を名乗り養子となります。亀之丞は、世話をしてくれた代官の娘千代を愛し、女の子までもうけていた。帰りを待ちわびていた祐圓はショックでした。

直親の下へ奥山因幡守の娘日夜が嫁いで参ります。祐圓を環俗させて結婚

させてもよかつたのではないかと思いますが、出家者とあつてそうはいかなかつたのかもしれない。

今川義元が、頭角を現す織田信長を討たんものと出陣を決意。井伊家当主直盛は、井伊谷八幡宮に戦勝を祈願し四百を率いて出陣。今川軍総軍三万五千。織田は尾張半国、どうかき集めても四、五千。勝利間違いなしと思われておりましたが、信長の奇襲に義元討ち死。井伊家も直盛以下重臣全員討ち死。引馬でも家老の豊前守は帰還したものの二十数名討ち死。行方不明者は倍近い状態。留守を預かるは家老の役目と、国に残つた小野但馬は、内心ヤレヤレとほくそ笑んだ。

「年寄りのわしが出陣して死ねばよかつた。若い孫の当主直盛が討ち死とは……」ハラハラと涙をこぼす直平。

おとわの父の死。直虎となるおとわの不運は、まだまだ始まつたばかりです。